



市の福祉イベントで、同時通訳をする吉森さん。講師の話を、手話と表情で分かりやすく伝える

「手」に託す、 この思い

11 月中旬、某日。吉森茂（62歳・吉城分教会長・岐阜県飛騨市）は、市主催の福祉関連行事の会場にいた。この日は、地元の中学生らによる意見発表や著名人の講演などが行われる。自身が指導している手話サークルのメンバーと共に、手話通訳者として舞台袖に立つ。

「みんな、緊張しているだろうな……」。代わる代わるステージへ向かう教え子の姿を、吉森は優しいまなざしで見送る。

天理大学卒業後、詰所で青年勤めをしていたとき、中途失聴の青年と知り合った。身ぶり手ぶりで話をしようと試みたものの、ほとんど会話にならなかった。

その後、修養科を志願。青年との出会いを機に、独学で手話を勉強していたこともあり、聴覚障害がある修養科生に、自ら声をかけた。

そんなある日、数人の仲間と手話で話していたときのこと。一人の女性が突然、右手の親指と人さし指で、まゆ毛の間を1回つまんだ。「迷惑ですか？」というサインだ。驚いて「どうしてそう思うの？」と尋ねると、女性は「嫌そうな顔をしているから……」と。

『「次は何を話そう」とか『この言葉はどんな手ぶりだっけ』と考えていると、眉間に皺が寄って怖い顔になってしまう。手話で会話をするときは、いつも以上に表情を豊かにすることが大切だと実感した。指導する際は「表情も言葉、であると、繰り返し伝えている」

昭和56年に結婚。最初に授かった男の子を死産で亡くした。連絡が入ったのは「子どもおちばがえり」の団参を終えて、教会へ戻る日の朝。立ち寄った遊園地で子供たちを遊ばせている間、吉森は人知れず涙を流した。

後日、医師からは「一命を取り留めても、脳に障害が残る可能性があった」と告げられた。

「障害を持って生まれていたら、一日の大半をその子のために費やしていただろう。その時間を、少しでも人さまのために使わせていただこう——」

手話に取り組む心を新たにした。この思いが、いまの吉森の原点になっている。

地元の手話サークルでは、入会後すぐに指導者を任された。いまま市内の二つのサークルで指導に当たっている。

指導には、お道の書籍を用いることもある。「教えを通して、サークルの会員たちに、相手に心を尽くす大切さを伝えることができれば……」との思いからだ。

「障害のある人も、そうでない人も、互いにたすけ合って暮らすところに、陽気ぐらしの世界は実現すると思う。手話を通して胸から胸へ、一人でも多くの方にお道の教えを伝えて、共に歩んでいきたい」

「音のない世界、に、今日も吉森の笑顔を添えた手話が届く。」